



永遠へのチケット

米澤穂信

文明が減びてしまった荒野のシエルトーに、博士とロボットが住んでいる。ロボットはかいたがいく博士の世話をするが、博士は天寿を全うし、シエルトーにはロボットだけが残される。ロボットはもう動かない博士のために、今日もシエルトーを掃除する……。

こういうSFを、むかし読んだことがあるような気がする。人間の命に限りがあるのに対してロボットのそれは永遠、あるいは永遠と思えるほどに長いというモチーフは、誰が書き始めたものだろうか。いま私の脳裏にはロビタ（手塚治虫『火の鳥』やR2・D2とC-3PO（『スター・ウォーズ』）、ダニール（『鋼鉄都市』）が浮かんで消えている。

少なくとも現在の技術力では、人間とロボットでは比較しようもなく人間の方が長命である。睡眠を除いたとしても一日十八時間稼働して、さほど大きな故障もなく八十年生きる人間は十分に想定できるが、同じことができるロボットは存在しないだろう。基盤を含む部品を定期的に交換すれば何とかなるかもしれないが、それを元のロボットと同一の存在と考えるべきかは、難しい問題だ。

言葉についても、同じようなことが言える。

かつて、ネットに放流された言葉は永遠であると考えられた時代があった。どんなテキストも誰かが保存しているが故に失われてしまうものは何もなく、ネットは言葉に永遠を与えられた。だが、幾多のサービスが開始されては終了していった今日、ネットには全てが残されると考えるのはあまりに素朴だろう。かといって物理メディアなら長く残るかというと、十年前のフラッシュメモリ、二十年前のハードディスク、三十年前のフロッピーディスクがいまも機能するかどうかは、少々あやしい。百年もつことは、規格の進化の面から見ても、ほとんど考えられまい。



よねざわ・ほのぶ ● 作家。1978年、岐阜県生まれ。2001年「氷菓」が第5回角川学園小説大賞奨励賞に選ばれデビュー。11年「折れた竜骨」で第64回日本推理作家協会賞、14年「満願」で第27回山本周五郎賞を受賞。22年「黒牢城」で第166回直木三十五賞、第12回山田風太郎賞を受賞。

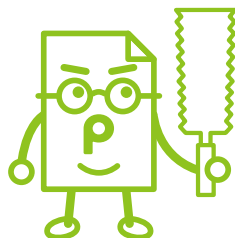
人間が言葉を発するのはコミュニケーションのためだが、それを書き残すのは永遠のためだ。少なくとも、能動的に廃棄されるまでは言葉を保つためだ。だから多くの文明が、永遠に残ってほしい言葉を永遠性の象徴たる鉱物、つまり石に彫りつけた。だが石はたいい風化、劣化を免れないし、持ち運べないし、なにより彫るのが大変である。竹筒や木筒、羊皮紙なら石よりも簡便だが、高価であったり、かさばったりする。それでは選ばれた人しか言葉を遺せない。

その点、紙はいい。誰でも手に入られ、薄くて軽い。劣化の激しい酸性紙でも品質次第で百年ぐらいいはもつし、中性紙なら三百年は残るといふ。和紙なら、千年の時にも耐えるだろう。それだけの猶予があれば、忘れ去られた言葉が再発見され、書き写され、延命されることも十分に期待できる。紙は私たちの手元にある、永遠へのチケットなのだ。

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

伐ることきで育つ森がある。

木を伐りすぎると森が減る。でも、何もしないと隙間なく木が生えてきて、日当たりが悪くなってしまうんです。森がすくすく育つためには、木を伐ること（間伐）も大切。さらに、そのとき伐った木（間伐材）は無駄にせず、紙づくりの原料にも使われているんだって。



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、[「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。](http://kamitsubu.com/) <http://kamitsubu.com/>

今回は6月2日号です。